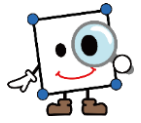




本多光太郎先生特集号



金研の祖、本多光太郎先生は1870年(明治3年)3月24日(旧暦2月23日)に現在の愛知県岡崎市で生まれました。先生の生誕を記念し、今回は本多先生特集号です。その生い立ちから振り返ります。

1 はなたらしの光さん

本多光太郎は1870年(明治3年)3月24日(旧暦2月23日)、篤農家の父兵三郎、母さとの元に生まれた。小学校時代の光太郎は暗記が苦手な音痴、そして手先も不器用で、学校からちょっと足が遠のき、通学途中の川で遊んでいたこともあったとか。

アデノイド気味で始終涙を垂らしており、「鼻汁たらしの光さん」と仇名された光太郎は決して秀才ではなかった。成績はずっとお尻の方に近かった。そのくせ身体だけは馬鹿に大きいので人目についた。口数の少ない、のっそりとした、そして何の特色もない少年であった。”

六人兄弟の末子として生まれた光太郎は人と争うことを好まず「小学校でも友だちと喧嘩をするというようなことは殆どなかった。鈍重で学問の出来ないものはとかく小供達からからかわれることが多かったが、「」にここにこ笑って済ます場合の方が多かった。それは三人の姉の下で柔和に育ったためとも見られ」「その柔和な態度は本多光太郎の生涯を通じて変わることはなかった。」(「本多光太郎傳」より)

2 随念寺学校、寺田塾

光太郎の尋常小学校(四年制)卒業を待たず、父兵三郎は他界。家督を継いだ15歳の兄寛三郎は父の遺志を継ぎ、光太郎を四年制の高等小学校、随念寺学校に進学させた。「百姓は総領だけでええわな、光太郎にはまァ都会で身を立てさせる、それにはちいと学問させて呉れるわなァ」というのが長子寛三郎の耳に残された言葉であった。兵三郎は学ばずして学を好んだ人であった。”

当時、尋常小学校卒業後、大半の者がたとえ成績優秀でも進学せず、家業の手伝いに従事したり、丁稚奉公に出されたりしていた。その中で「自分だけが高等小学校に進んだことはいささかの誇りでないこともなかった。」「往復三里余の通学は肉体的には大した苦痛ではなかった。学問は依然として苦が手であった”。

「光太郎の唇の上の二本の棒は、彼がどうやら四年の課程を終ってこの高等小学校を卒業するころまでその存在を失わなかったが、彼はここを卒業することによって地方の最高の学窓を出たのである。”

それでも、農家の末子の進路は家業の農業の他なく、光太郎は農業に従事することになる。ただ、「黎明の時が近づきつつあった。学問を苦が手としていた彼の手に、始終何かの本が抱かれるようになった。”「農耕の仕事の有難いことは夜間がひまなことであった。秋の夜長を彼は、納屋の二階で思うように読書に親しむことが出来た。やがてその延長で彼は寺田塾に通うことになった。”

「塾の先生は寺田松次郎先生で、昼間は小学校で教鞭をとり、夜は地方の青少年の志あるものを集めて個人教授をやっていた。主として漢学を講じたがその他に初等英語と日本地理、世界地理も教えられた。”

その頃、秀才の誉れ高かった次兄浅治郎は既に東京で苦学していた。浅治郎は随念寺学校卒業後に尋常中学、高等中学、東京帝大と進むことになる。帝大では歴史学を専攻した。(「本多光太郎傳」より)

3 向学心

寺田先生の熱い講義もあり、向学心に目覚めた光太郎は思い悩み、ついに当主寛三郎に東京行きを願い出る。

「兄さん、願いがある、わしを東京に出して呉れんかナ」」「なに？東京？そりやまたえらい事じゃ、東京に行って何するんだ」「学問したい」「ふうん、何学問するんだ？」「それはまだ決まっとらん。けれど田舎で百姓して埋もれたくないと思て……」寛三郎さんは腕を組んだ。不びんだと思う心がじんわり湧いては来た。然し「そりゃ困るな、浅治郎を東京に出して学問させとるだけでもこの家は大きとじゃ、」「その上光太郎まで、となつたらとても此の家がもたんナ、そりゃむりじゃ、まアそりゃ止めて貰おう。」」さらに続けて、浅治郎は小柄な上、秀才で百姓には向かないが、光太郎はその正反対、いずれ土地を分けるので地主にでも…と諄々と説き、光太郎は言い返すこともできず、すごすごと引き下がるほかなかった。母にも相談をしたものの家父長制の根強い時代、寡婦となっていた母に策はなく、涙するしかなかった。”というわけで、要するに光太郎の願いは贅沢至極ということに相場がきまってしまった。彼の小学校や高等小学校に於ける通知簿の評点のかんばしくなかったことがこの相場を決定する相当重要な因子となったことも否定できない。”(「本多光太郎傳」より)





4 握り飯

その後、光太郎は二度と上京を乞うことなく、黙々と仕事に励み続けるが、“不毛に挑む野良の行き還りにも、矢作川の堤防修理のもっこ担ぎの労役に従っている間にも、上京と勉学とに向けられた彼の悲願は募る一方であった。”

そして明治19年春のある夜半、光太郎は手紙を置いて出奔した。半紙に書かれた手紙には、“どう見ても達筆とはいえぬ毛筆書きで—いろいろ考えて見たが私はどうしても東京に行って勉強します。不孝の罪は他日の成業によって御つぐのいいたします、それまでは死んだものと思ってください、光太郎—”とあった。

未明に気づいた兄寛三郎はすぐに後を追ひ、徒歩以外の方途がないのが幸いし、無事探し出す。

“一きわ大きい一樹の下で、光太郎は悠々として握り飯の朝飯をしたためていた。朝焼けの空を背景とする蒲郡辺りの山容を眺めながら、子供のあたまぐらいの大きな握り飯であった。東下りの塙垣右衛門を若くしたような風貌である。「おう、まだこんなところか」あまり訳なく捕まえたので、寛三郎はついこんなことを言った。”

“よそ行きの顔をしていた光太郎の表情は、兄の顔を見ると恥かしそうに俯向いた。「おれも腹が減ったぞ、握り飯はまだあるかん？」光太郎はごそごと包を開いてあたまほどの握り飯を兄の方に出した。”

“二人ならんで握り飯をほほ張った。じわじわと心の中に相通うものがあった。「どうだん、おれはお前の兄じゃ、悪いようにはせんからここは一つおれに任せて家に帰ろう、帰ってからまたよく相談しよう」暫らくして光太郎は黙ってうなづいた。そのとたんに涙が……パラパラッとこぼれた。「お前は、金はなんぼもつとるかん？」光太郎は黙って黄布の財布を差し出した。小銭を混えて二円二十銭” 寛三郎も胸が熱くなった。「阿呆じゃなお前、こんなことで東京に行けるもんか、途中で飢え死するわナ」「二日や三日は水のんででも歩けるでナ」それが光太郎のはじめて口を出した言葉であった。”（「本多光太郎傳」より）

5 成立学校、第一高等中学校、東京帝国大学理科大学

その後、次兄浅治郎が当主寛三郎に、経済的な負担は自分も負うからと光太郎上京の許可を乞う書簡を出し、寛三郎が上京を認めた。明治20年3月、光太郎は晴れて竹馬の友と三人で上京。

“浅治郎は光太郎の学力をしらべてみた。寺田塾で勉強したことは此の場合非常に役に立っていることを発見した。” “バランスはもちろん良くないにしても兎に角寺田先生の精神教育が、殊に漢学の方面などでは相当の効果をあげている。何よりも有難いことは、光太郎に学問を求めるといふ強い情熱が湧いて来ていることであった。”

“結論として彼は、兎に角光太郎の学力をもう少し添加してやって相当な学校に入学できるようにしなければいけない。” “それには神田駿河台の成立学社が評判が良い。光太郎はとりあえずこの予備校に入学することにきまった。”

“光太郎はその教室に通いはじめて” “自分の学力が凡そお粗末であることに気がついた。それをとりかえすための光太郎一流の粘り強い勉強がそれから二年の間つづけられた。” 二年後、光太郎は第一高等中学校と海軍兵学校に合格。軍人には向かないと考え、経済的負担の少ない海軍兵学校をあえて避け、一高に進学。

“第一高等学校は予科が二年、本科が三年である。本科に進むと文科と理科とに分かれる。” 光太郎は消去法で理科に進学。

そして“明治二十七年、本郷台に蝉が啼く夏七月、本多光太郎は、正式に言えば東京帝国大学理科大学物理学科に入学した。”（「本多光太郎傳」より）

6 研究者『本多光太郎』

ここから光太郎は勉学と研究とに明け暮れ、本格的に研究者生活が幕を開ける。

“物理学に関する古来有名な原書は” “むさぼる様にして全部読んだ。先人の立派な論文は” “図書館にあるものはことごとく学んだ。しかしそれよりも更に周囲の人々をおどろかしたのは彼の実験ぶりであった。” “光太郎の実験はくり返しくり返し実に丹念で” “全く実験の鬼であった。彼は実験が楽しくてたまらないようであった。百姓で埋もれる筈の光太郎が” “日本一の大先生たちの指導の下に日本一の物理実験室で人類未知の実験をさせてもらうというそのことで彼の心の中は謙虚な法悦で一杯であった。” 成績優秀だった光太郎は大学三年で授業料免除の特待生となり、母に“「小生生まれてはじめての孝行に候」”と書き送る。

明治30年7月、首席で大学を卒業し、大学院に進学、母さんと死去。翌年には下宿先の大家のとりなしで結婚。

明治36年1月理学博士の学位を授与される。“光太郎の理学博士は岡崎地方ではあまりにも意外な出来ごと” “人工衛星が月をまわって帰ったほどの大事件であった。” 明治40年2月“東北帝国大学理科大学開設を前に教授に内定、独英両国へ物理学研究のため満3カ年の予定で留学を命ぜらる” 留学は4年に延び、明治44年2月“帰朝、東北帝国大学理科大学教授に任ぜらる”（「本多光太郎傳」より）

この後の快進撃を少し上げれば、後進を育て、金研の礎を築き、K・S鋼、新K・S鋼を発明。東北帝国大学総長となり、在職25周年記念事業として本多記念館が作られる……この『鉄鋼の世界的権威者』は昭和29年に死去。

今回の図書室だよりは『本多光太郎傳 / 石川梯次郎著』（東京：日刊工業新聞社、1964.12）をもとに作りました。引用は原文のままです。作者は本多先生を終始温かいまなざしで見つめておられ、本書を読み進めるうちに、真面目で努力家だけでなく、ピュアで魅力あふれる本多光太郎にどんどん魅了されていきました。少し古い本ですが、とても読みやすいので、興味を持たれた方はぜひ、ご一読を。本書は金研図書室の他、学内に多数所蔵しています。

（資料番号：05057002658、配架場所：金研図書室（図書）、請求記号：1E/B93）